

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第187集

春日居館跡

長野県佐久市春日 春日居館跡発掘調査

2011. 3

佐久浅間農業協同組合
佐久市教育委員会

春日居館跡の発掘調査について

今回の発掘調査は調査面積が300m²という小規模なものでした。しかし、大変重要な発見が2つありました。

まず第1として『堀跡』の発見があります。この春日居館跡については明治初年の文献に「星濠二重ありて堀端小路の称あり。」という記載が残っているのみで、具体的な事は全く解っていませんでした。今回の発掘調査では東西方方向に延びる大小2本の溝を確認しました。このうち北側の溝は規模が大きく、深さは2m、幅は5m以上と推定できます。館の「堀」にふさわしい規模のものでした。この事から文献に書かれた二重の堀が今回発見された可能性が非常に高く、館の具体的な姿が一歩確認できることになります。

次に『五彩碗』の出土です。本品は戦国期（16世紀代）の竪穴状遺構から土鍋片や青磁片などと共に出土しました。碗の模様は外面にかぶり物をした官人、内面には菊唐草の文様がそれぞれ赤・緑・黄色等で描かれています。本品はこの特徴から16世紀中頃に中国の景德镇系の窯で焼かれた「赤絵」または「五彩」と呼ばれる焼物です。「五彩」は白磁などの表面に赤・黄・緑など各種の釉を使って絵付けするもので、中国では12世紀末に考案され、明や清の時代には優れた製品が数多く作り出されています。

五彩は長野県内からの出土例が極めて少なく、なぜこの春日の地から出土したのか、どのような流通経路で持ち込まれたのかが今後の課題となります。

本館跡は戦国末期、佐久の平定に尽力した依田信蕃をはじめとする依田氏の居館として伝承のある場所です。本資料はその活躍を裏付ける一品となるかもしれません。



例 言

1. 本書は、佐久浅間農業協同組合が計画する春日支所建設工事に伴う春日居館跡の発掘調査報告書である。
 2. 調査原因者 佐久浅間農業協同組合
 3. 調査主体者 佐久市教育委員会
 4. 遺跡名及び所在地 春日居館跡 (KKI) 佐久市春日2994-1
 5. 調査期間及び面積 調査期間 平成22年4月13日～平成23年3月18日
調査面積 300m²
 6. 本書の編集・執筆は富沢が行った。
 7. 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本書作成にあたり、大学共同利用機関法人人間文化研究機構 小野正敏氏と長野県埋蔵文化財センター 市川隆之氏にご指導を頂きました。また、佐久浅間農業協同組合の関係各位には、御協力を頂きました。記して感謝いたします。

月 例

- 遺構の略記号は、竪穴状遺構(Ta)・土坑(D)・溝状遺構(M)である。
 - 挿図の縮尺は次のとおりである。下記以外の物については挿図中にスケールを示す。
竪穴状遺構1/80 土坑1/80 土器1/4 石器1/4・1/3 古鏡1/2
 - 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」として示した。
 - 土層・遺物胎土の色調は、1988年版「新版 標準土色帖」に基づいた。
 - 遺物観察表の()は残存長、()は残存器高を示す。

目 次

例言·凡例·目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

1. 立地と経過
 2. 調査体制
 3. 遺構と遺物の詳細

第二章 遗物与遗物

1. 壺穴状遺構
 2. 溝状遺構
 3. 土坑
 4. ピット
 5. 繩文期の遺物
 6. まとめ

写真図版

報告書抄録



第1図 遺跡位置図 (1:50000)

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

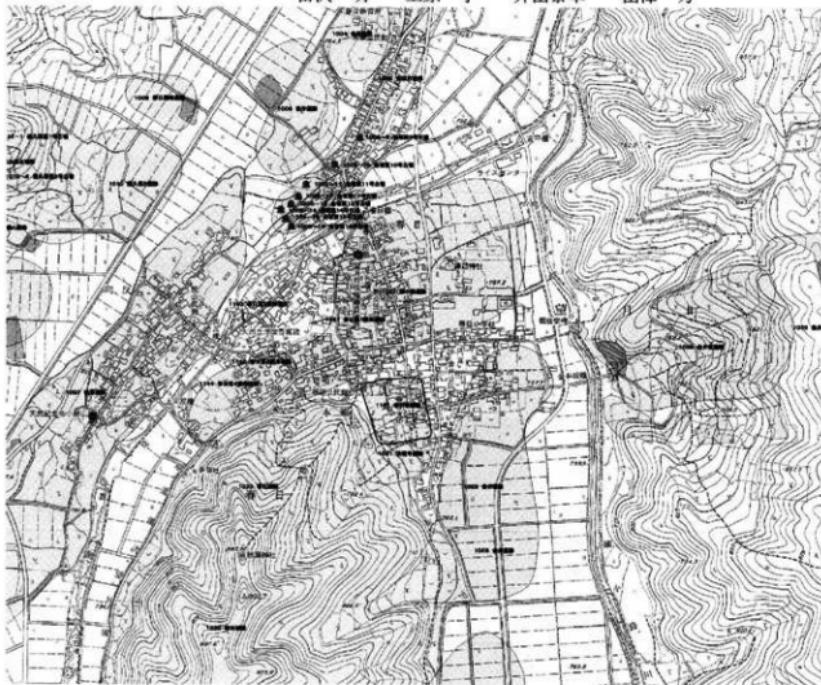
1. 立地と経過

春日居館跡は佐久市の春日地籍に所在する。遺跡は鹿曲川と細小路川の合流地点より上流700mに位置する。館跡内には現在「康国寺」があり、地割りから一辺150m程の区画囲が「コ」字状に巡ることが推測できる。寺に接して北側には「堀端通り」の地名が現在でも残る。館跡近辺の標高は770m内外を測り、館の南西側にあたる120m程高い山尾根上には春日城跡が所在する。

今回、遺跡内において佐久浅間農業協同組合により春日支所建設の計画がなされたため、佐久市教育委員会では文化財保護法第93条の届け出を受け、試掘調査を行った。結果、開発対象地に遺構が発見され保護協議を行い遺跡破壊の恐れがある部分については記録保存を目的とする発掘調査を行う事となった。

2. 調査体制

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長	土屋盛夫
事務局	社会教育部長	工藤秀康	
	文化財課長	森角吉晴	
	文化財調査係長	三石宗一	
	文化財調査係	林 幸彦 並木節子 須藤隆司 小林眞寿 羽毛田卓也	
		富沢一明 上原 学 井出泰章 出澤 力	



第2図 周辺遺跡位置図 (1:10000)

調査体制

調査担当者	富沢一明	澤井知春	清水澄夫	羽田利明
調査員	柏木義雄 坂井一夫 川瀬洋太 橋詰勝子 狩野小百合	臼田猛 小島真 上村貴恵 橋詰信子 広瀬梨恵子	池田勝吉郎 井出孝子 柳澤孝子 清水律子 田中ひさ子	檜山修一 林まゆみ 清水律子 堺益子

3. 遺構と遺物の詳細

遺構	竪穴状遺構	3棟
	土坑	18基
	溝状遺構	2本
	ピット群	26個
遺物	縄文土器(前期～後期)	
	中世陶磁器類	古錢
	鉄製品	石製品

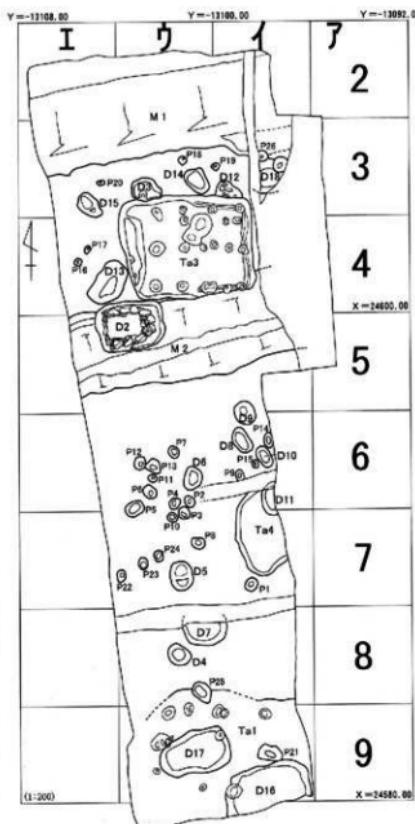
土層

今回の調査地点は蓼科山麓の尾根が沖積地へと変わる場所にある。地形的には東に向けて傾斜する地形であり、周辺部よりもやや高かったが、調査地点の地層には一抱え以上の大型の川原石が遺構覆土を中心に転がった状態であった。

遺構確認面と考えられる層についても、表土下は大型の川原石や細かな砂利混じりの二次堆積ローム層がある部分と川原石と砂の混合層が調査区に広がっていた。これら川原石は、遺跡西側に流れる鹿曲川の氾濫により運ばれてきたものと考えられる。



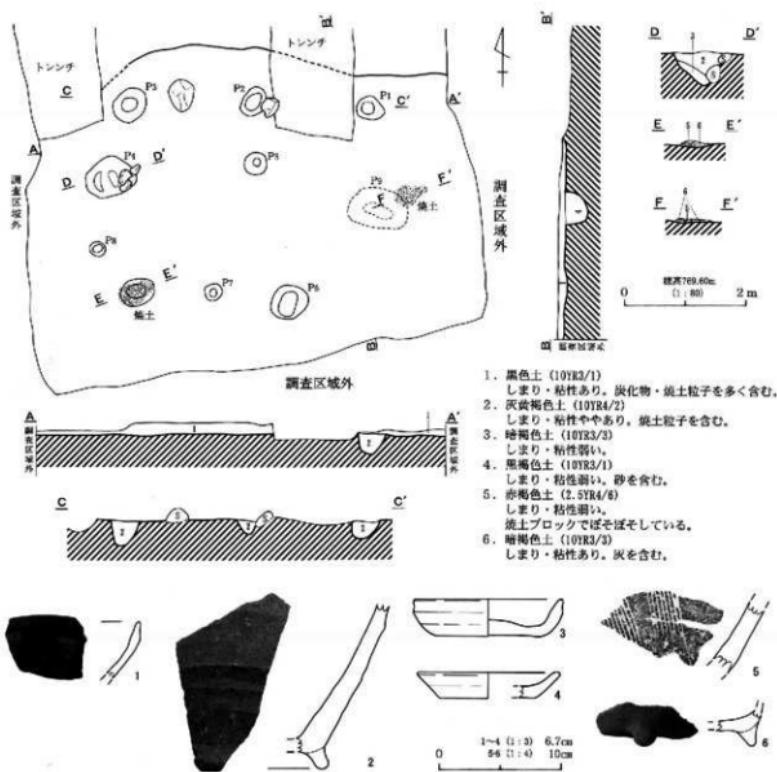
東よりの遺跡遠景



第3図 調査全体図 (1:200)

第II章 遺構と遺物

1. 竪穴状遺構



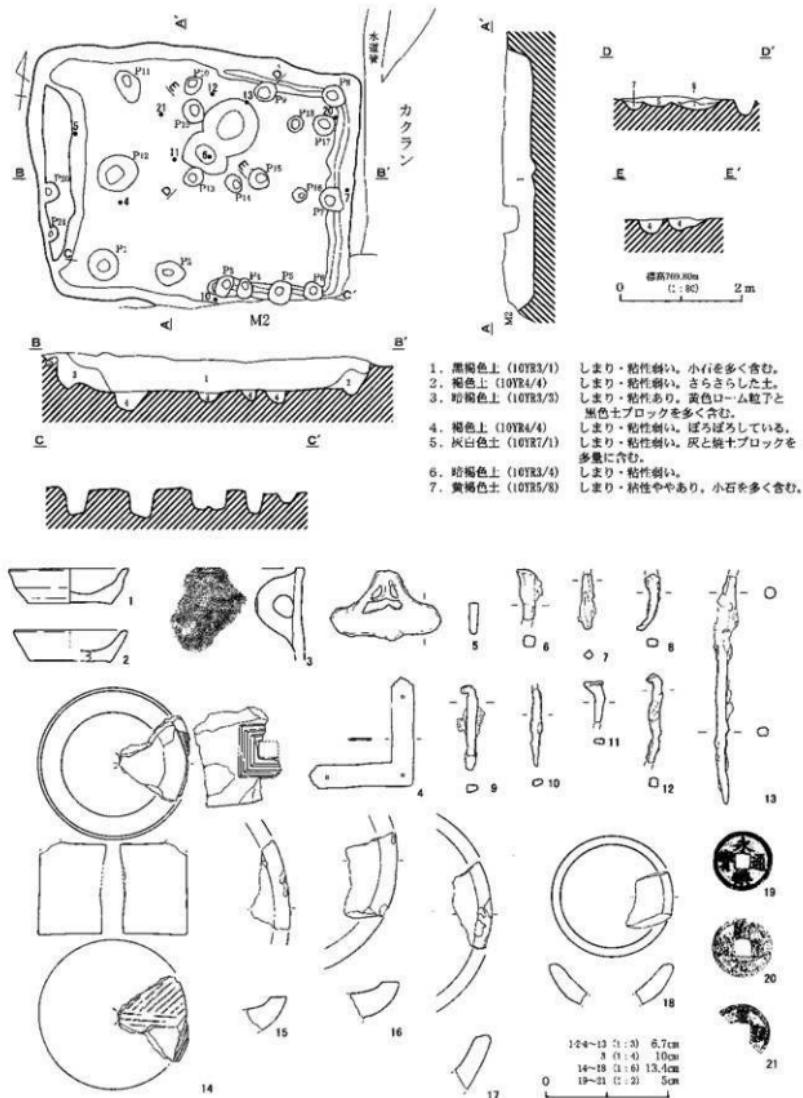
第4図 Ta 1号竪穴状遺構及び出土遺物実例図

(1) Ta 1号竪穴状遺構

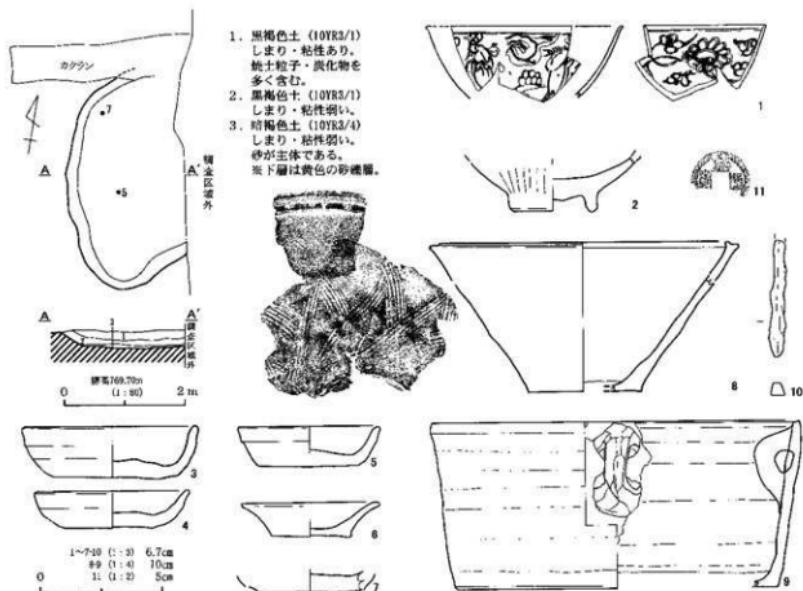
本址は調査区南端に位置する。東西と南側は調査区外となる為全容は不明である。薄い覆土下に床と考えられる僅かな硬質面があり、この範囲を竪穴状遺構とした。また床面には焼土の広がり2カ所とピットを9カ所確認した。ピットの規模は径26~98cm、深さは16~72cmを測る。P 1~3は直線的に並び建物の柱穴と考えられる。出土遺物は覆土中のものがほとんどであった。

(2) Ta 3号竪穴状遺構

本址は調査区北側に位置する。M 2号溝状遺構より古い。形態は方形で、規模は北壁5.28m、南壁4.62m、西壁3.83m、東壁3.52mで、壁高は13~59cmを測る。東側に壁溝が巡り、西側にはテラス



第5図 Ta 3号竪穴状遺構及び出土遺物実測図



第6図 Ta 4号竖穴状造構及び出土遺物実測図

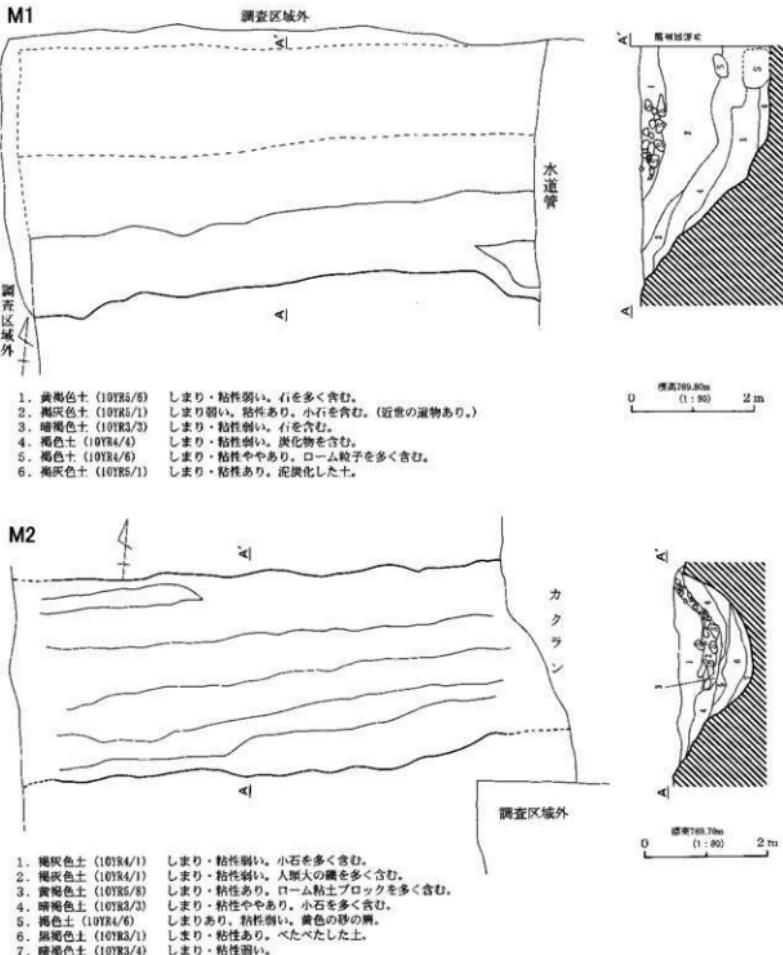
が設けられていた。ピットは21個検出され、東西方向に3列の柱穴と考えられる。規模は径22~68cm、深さ7~45cmを測る。また北壁中央よりの床面には灰の詰まった土坑が確認された。規模は長軸138cm、短軸80~90cm、深さ16~22cmを測る。形態は二つの土坑が連結したような状態であり、新旧は確認されなかった。床は踏み固めたような土であった。

遺物は覆土中や床面から出土した21点を図示した。特に金属製品の出土が多く、4は金箔を施した銅製品で三カ所に止め穴と思われる穿孔があった。形態より木製品の留め金と考えられる。5は火打金ではほぼ完形である。山形タイプのもので、頂上部には3カ所の窓が開けられている。6~13は釘類と考えられる。1と2はカワラケであり、胎土はよく精錬されている。

(3) Ta 4号竖穴状造構

本址は調査区中央部に位置し、東側が調査区外となる。D11号土坑と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は不整形で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸3.50m、短軸1.93mで、壁高さは9~19cmを測る。ピット等は確認されなかった。出土遺物は床面上からの出土が多かった。特に注目される遺物としては巻頭でもふれた景德鎮系の五彩碗がある。4点の破片が接合したがいずれも覆土中からの出土で、彩色の状態から二次焼成を受けていると考えられる。6は土鍋と同じ胎土の灯明皿である。8はすり鉢で、胎土は上鉢と同じく荒い砂粒子を多く含む。底部は回転糸切離しである。

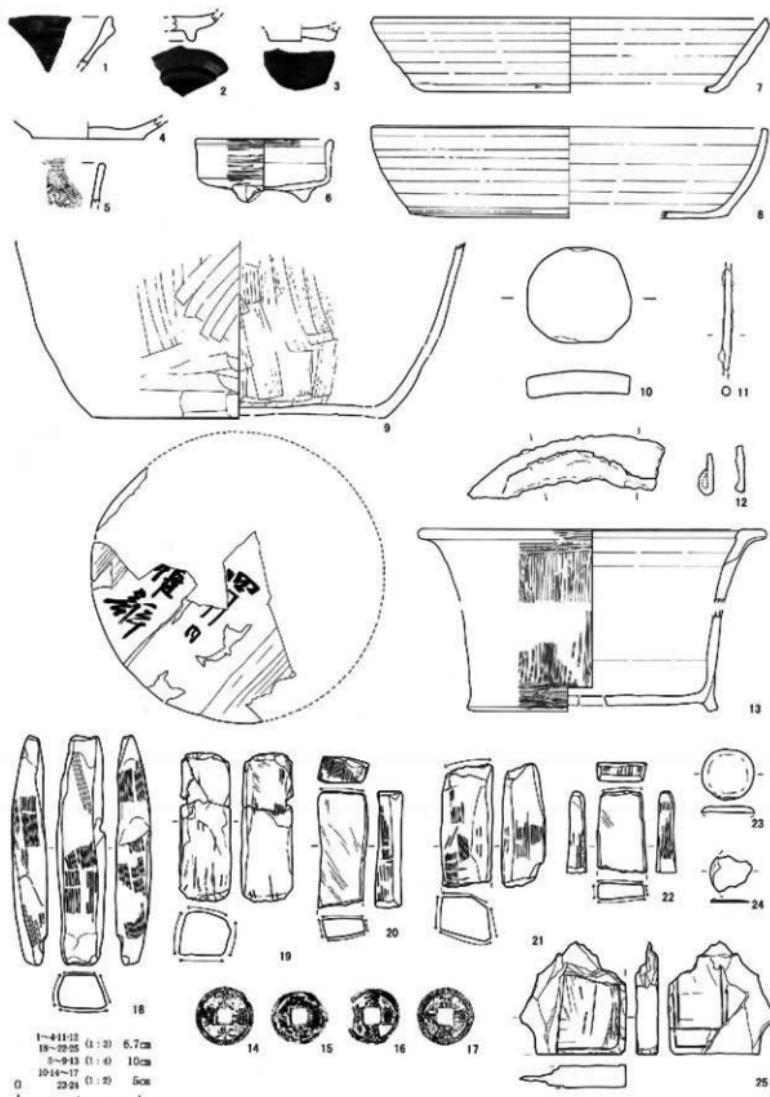
2. 溝状遺構



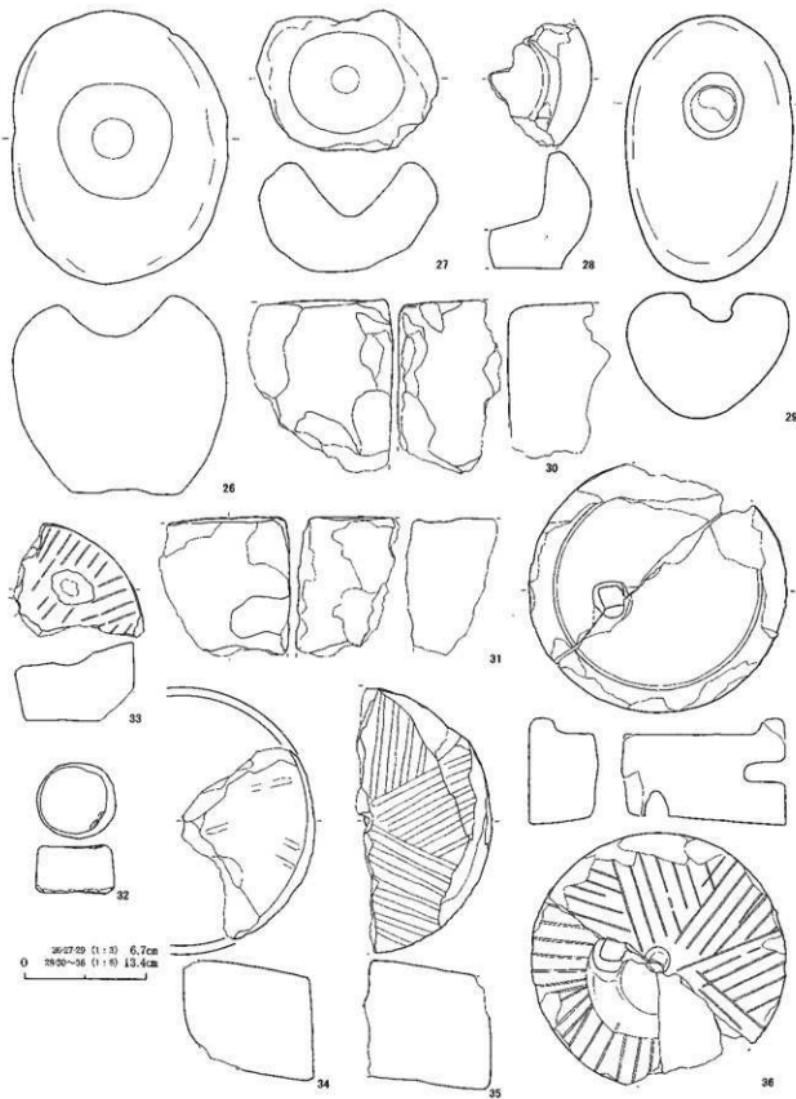
第7図 M 1号、M 2号溝状遺構実測図

(1) M 1号溝状遺構

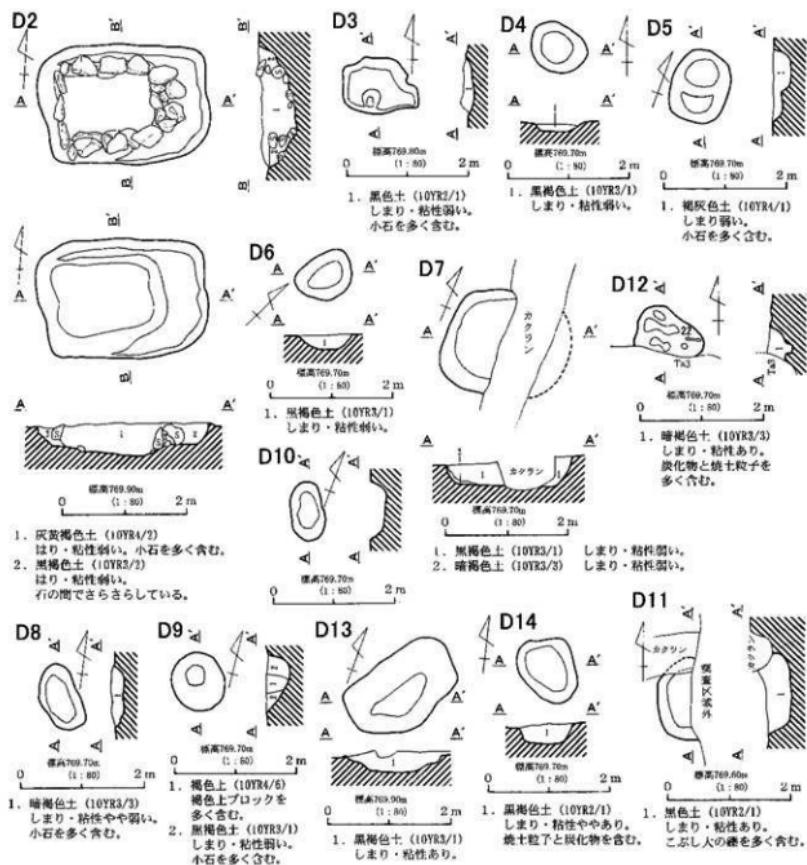
本址は調査区北側端で検出された。溝は東西方向に延びるものと考えられ、北側の溝立ち上がりは確認できなかった。規模は検出部で幅4m・深さ2.05mを測る。覆上最上層には人頭大の円礫が多量に投げ込まれており近代の遺物が、また第2層中には17~19世紀代の遺物が混入していた。



第8図 M1号溝状造構出土遺物実測図(1)



第9図 M1号溝状遺構出土遺物実測図（2）

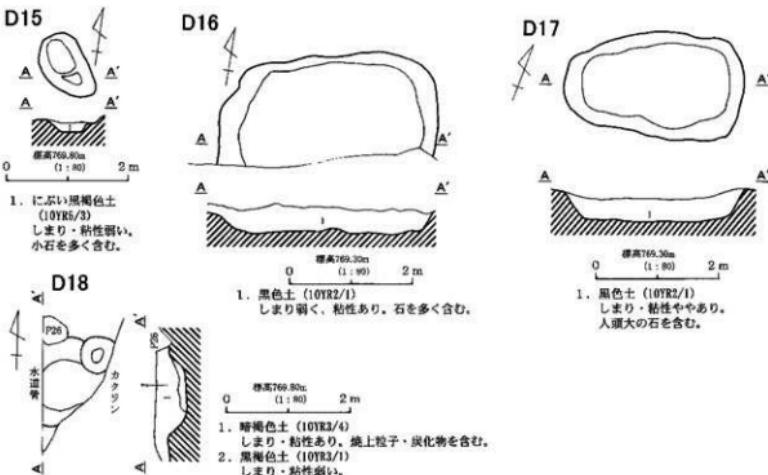


第10図 土坑実測図（1）

遺物は溝覆土上層を中心に数多く出土した。7と8は土鍋であるが、器高が低くいわゆる「焼鉢」に分類される。9は土師質の火鉢で底部に墨書が書かれている。13は推定器高であるが土師質の植木鉢であり、底部に穿孔がある。12は鐵製品であるが一部を内側に折り曲げて鎌のような形状に変形した物で使用目的は不明である。23と24は基石、25は硯と考えられる。32は円柱状の石製品で二次焼成を受けている。

(2) M 2号溝状遺構

本址は調査区中央部に位置する。M 1号溝と同じく東西方向に延びると考えられ、ほぼ2本の溝は平行している。規模は幅3.30m、深さ1.30mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。本址も覆土の上層部



第11図 土坑実測図(2)

分に人頭大の礫が詰まった層が確認されたが、近世遺物等の混入は見られず、6層や7層を中心に図示した中世遺物が出土した。M2号溝からの出土遺物にはM1号溝に比べて磁石や白類がないのが特徴的であった。

3. 土 坑

今回の発掘調査では18基の土坑が検出された。これらの土坑はその覆土の状態や出土遺物より、縄文期と中世にそれぞれ所産時期が分かれる。以下がその大別である。

縄文期 D3. D5. D6. D8. D11. D12. D13. D15. D16. D17.

中世 D2. D4. D7. D9. D10. D14. D18.

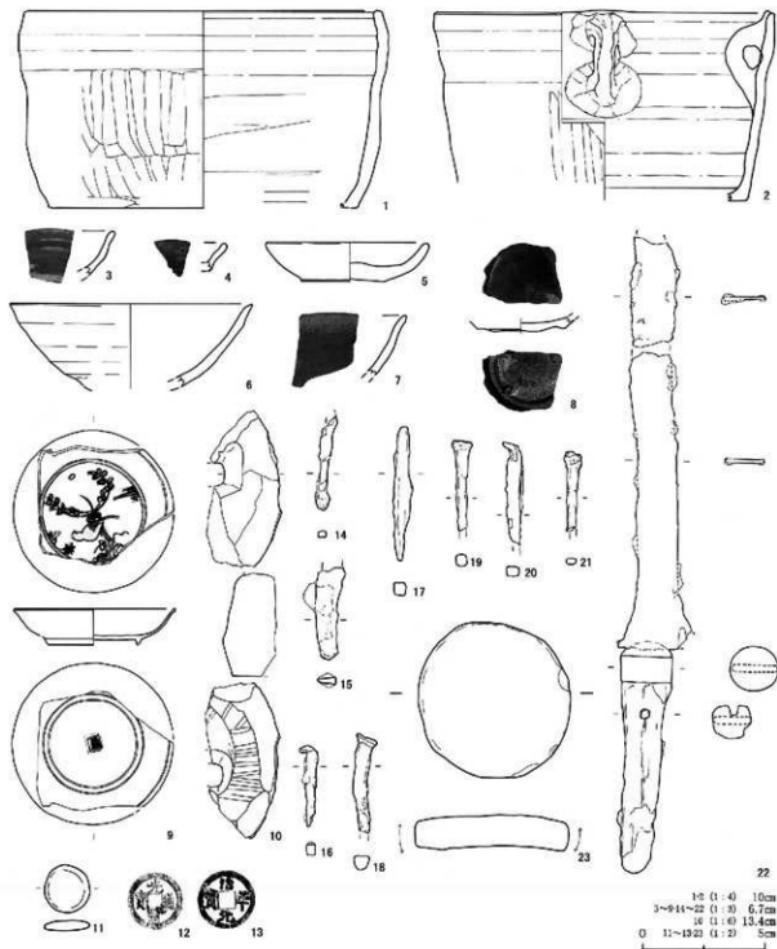
ここでは特徴的な遺構について記載し、そのほかについては「遺構計測一覧」を参照されたい。

(1) D2号土坑

本址は調査区中央の北よりで検出された。M2号溝状遺構と重複関係にあり本址の方が新しい。形態は東西方向に長軸をもつ方形で、中央に石組み遺構を持つ。この石組みは北壁と南壁が最大三段で高さ40cmに扁平な川原石を平らに積み上げている。これとは対照的に東西の壁は扁平な川原石を立てた状態で使用し、高さも40cm程度である。土坑底面は硬質化したような様子は観察できなかった。石組みを外すと一回り大きな掘り込みが検出された。本址からの出土遺物は小片化した土鏡やカワラケ片2点があったのみである。

(2) D12号土坑

本址は調査区北側のTa3号竪穴状遺構の北壁に接するように検出された。新旧関係は本址の方が古い。本址からは図示した鉄製品が出土した。柄を下向きにして出土し、先端部を一部欠損する。銅製品による貴金属が装着され、柄の部分には木質がサビ化して残存している。一見すると小刀に見えるが、刃部が鋸刃状になっていることと柄先が広がる事から鋸の可能性も指摘できる。

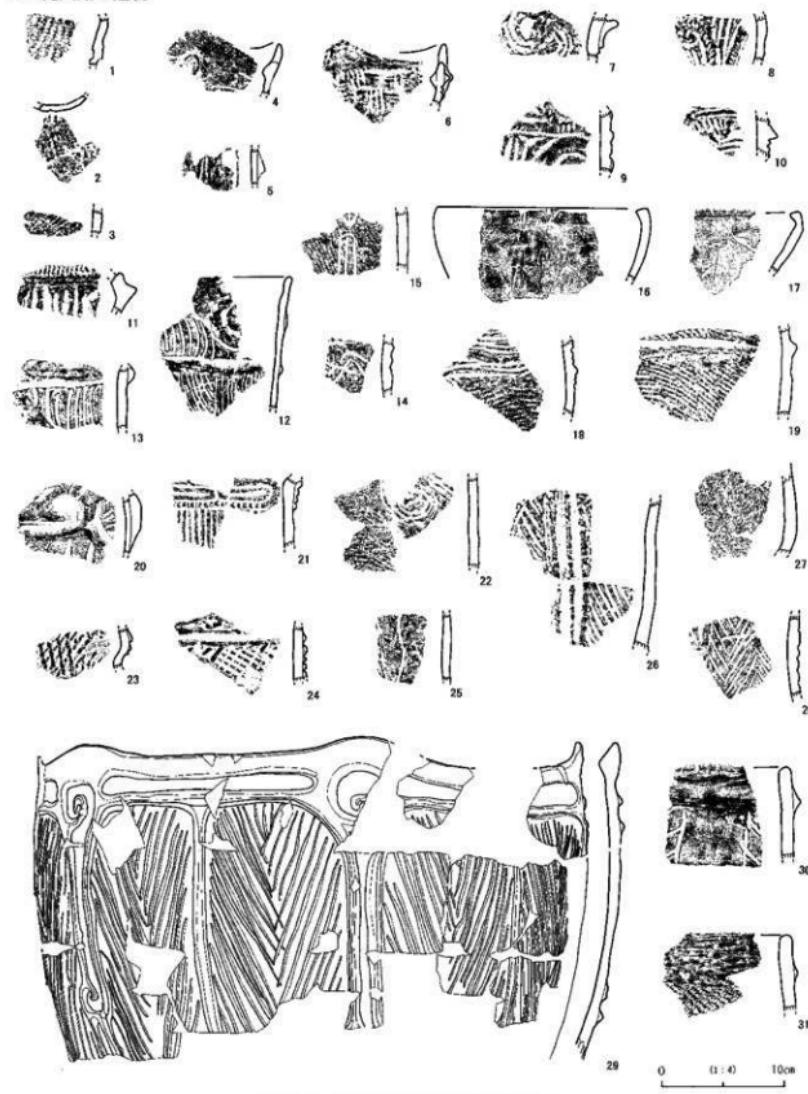


第12図 M2号溝状遺構、土坑、ピット出土遺物実測図

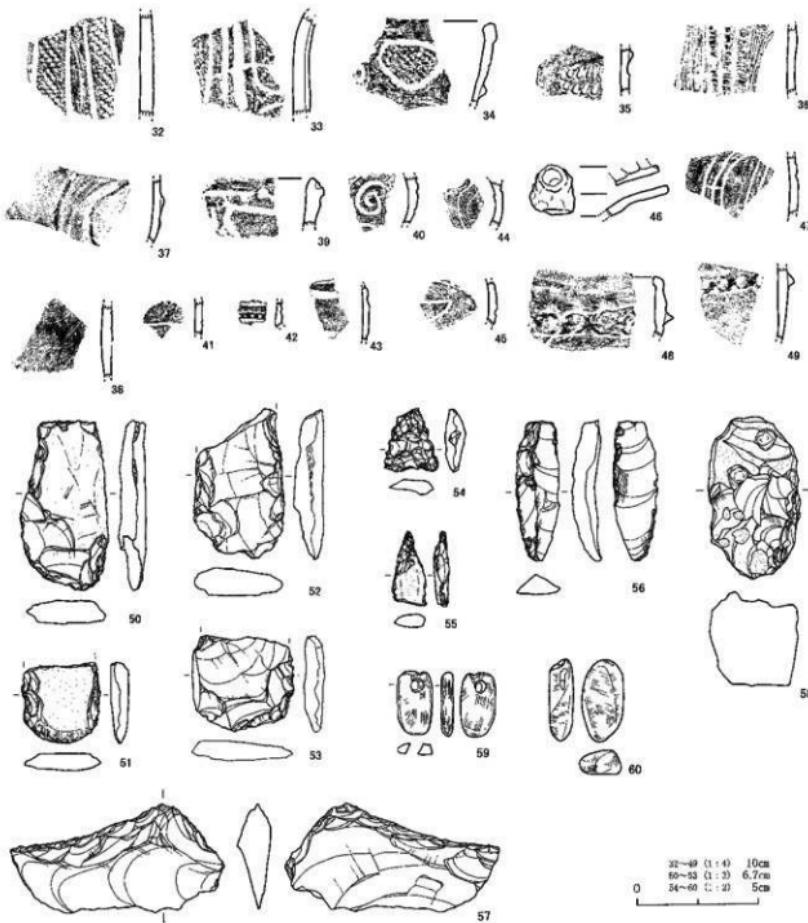
4. ピット

今回の調査では26個のピットが検出された。調査地点では縄文と中世二つの時期の遺構が検出されていることから、これらもそれぞれの帰属時期があると考えられるが出土遺物のあるものも少なく詳細は不明である。なお、掘建柱建物になりそうなピットは確認できなかった。

5. 縄文期の遺物

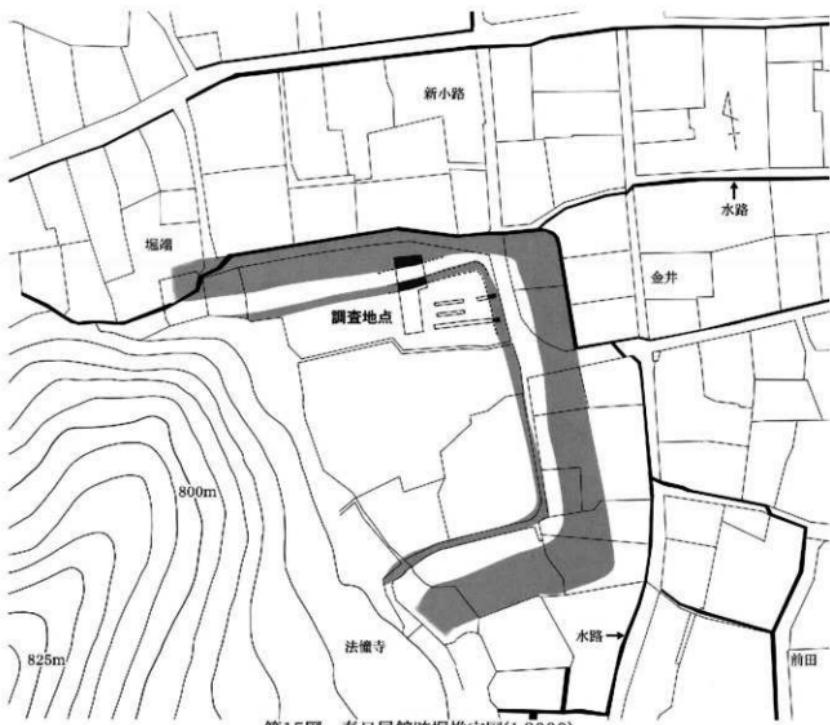


第13図 縄文期出土遺物実測図（1）



第14図 繩文期出土遺物実測図（2）

ここでは今回の調査によって出土した縄文期の遺物を一括して扱う。出土地点については遺物観察表を参照されたい。土器は前期から後期まで各時期を網羅するように出土しており、特に中期後半から後期までのものがやや出土量が多かった。縄文期の検出遺構は土坑のみであったが、鹿曲川の対岸に位置する後沖遺跡などは縄文集落が展開する為、木道跡周辺でも集落址発見の可能性は十分にあると考えられる。なお、注目される遺物とし、M1号溝状遺構からの出土であるが翡翠の垂飾りがある（第14図-59）。片面からの穿孔でほぼ完形である。また、未製品（第14図-60）と考えられる石製品も出土している。



第15図 春日居館跡堀推定図(1:2000)

6.まとめ

今回の発掘調査は300m²の小規模な調査であったが大きな成果が得られた。まず、第1に館の堀址と考えられる溝状遺構2本を確認できたことである。明治初年に書かれた『長野県町村誌』春日村「金城山康国寺」の項には「…この地は祖父下野守信守、父依田右衛門信蕃、二世の居址たるを以て寺とす。境内大杉・巨桜あり。堀濠二重ありて堀端小路の称あり。方二町、西は穴小屋の山城なり。…」という記載があり、幕末までは二重の堀が一部残存していたか、伝承が残っていた事となる。今回の発見された2本の溝はこの事実を裏付ける可能性が非常に高い。上に示した図は調査成果と現状の公図から堀址位置を推定したものだが、これによると山城を背に「コ」の字状に方150m程の中世館跡が浮かび上がる。

次に「五彩碗」である。景德鎮系五彩の出土は佐久地域はもとより長野県内でも希少例である。日本国内でも少數であるが戦国期の町屋や館などから出土例があり、主に16世紀第3四半期頃から流通したと考えられている。館の主と考えられる依田氏の活躍時期と重なることから、依田氏使用も考えられるが、五彩碗と共に伴する4号竪穴状遺構の出土遺物が17世紀初頭を示すものも含まれることから「康国寺」建立後の持ち込みも考えられる。どちらにしても今回の調査では館の全容把握は難しく、結論は今後の周辺部調査の進展に委ね、難泊であるがまとめとしたい。

第2表 Ta-4号棺穴内装備											
No.	種別	器種	法 量	成形・調整・文様	外 面	内 面			備 考	出土位置	
1	陶器	鉢	口底長径(底盤厚) (4.1)	ロクロ					海戸・美濃 16世紀初頭?	IV区	
2	陶器	ごん鉢	(10.0)	ナデ					尾張 13世紀前半	II区	
3	陶器	カワラケ皿	9.2	6.5	2.2	ロクロ	回転系切り出し				
4	陶器	カワラケ皿	8.9	6.0	1.5	ロクロ	回転系切り出し		16世紀後半	II区	
5	陶器	瓦葺すり鉢		(5.5)	ナデ				沈家による掘り面	13~14世紀	
6	陶器	晉和		(2.9)	ナデ					16世紀	

第3表 Ta-4号棺穴内装備														
No.	種別	器種	法 量	成形・調整・文様	外 面	内 面			備 考	出土位置				
1	陶器	器種	「T底長径(底盤厚) 7.4	5.1	2.1	ロクロ			ロクロ	底部回転系切り出し	15世紀末~16世紀			
2	陶器	カワラケ皿	7.0	5.0	1.9	ロクロ			ロクロ	底部回転系切り出し	IV区			
3	陶器	土鍋		(7.0)	ナデ						I区			
No.	種別	器種	法 量	成形・調整・文様	外 面	内 面			備 考	出土位置				
4	金具	金網製	1/1	6.6		8.92	川上位鑑	茶・材	残存率 底大面 底大面 底大面 底大面	底大面 底大面 底大面 底大面 底大面	14.0	1.453	I区	
5	火打ちがね	金網製	1/1	4.3	6.3	24.17	13	釣?	底製品		(8.9)	(10.7)	(11.5)	8/14.30 III区
6	鍔?	金網製		(3.1)		5.38	15	茶口・上	鷹石安山岩		(1.12)	(4.9)	(4.4)	13/16.6 I区
7	鍔?	金網製		(3.4)		3.38	16	茶口・下	鷹石安山岩		(10.7)	(6.8)	(4.7)	24/3.60 IV区
8	鍔?	金網製		(3.5)		2.06	17	白	鷹石安山岩		(10.8)	(5.0)	(6.7)	24/0.21 I区
9	鍔?	金網製	1/1	5.2		4.85	IV区	日	鷹石安山岩		(7.1)	(5.9)	(5.0)	11/3.86 IV区
10	鍔?	金網製		(4.7)		2.58	19	白	新製品		1/1	(明、1408年)		
11	鍔?	金網製		(2.5)		1.69	20	開元通寶?	新製品		1/1	(唐、621年)		
12	鍔?	金網製		(5.5)		5.56	I区	生口透口	新製品		1/2	(北宋、1038年)		

成形・調整・又被				備考	出十代世
No.	種別	注	量	外 面	内 面
1	陶器	山形長颈瓶(高身)	29.5	16.2 口縁クロコナデ・制部ヘラナデ	胴部ヨコナデ・口縁クロコナデ
2	陶器	土鍋	28.0	15.4 口縁クロコナデ・胴部ヘラナデ	山根ヨコナデ・胴部ヨコナデ
3	陶器	土鍋	(3.2)		
4	陶器	丼	(2.1)		
5	陶器	カワラケ皿	10.0	5.0 ロクロ	
6	陶器	平碗	15.0	2.4 (5.3)	
7	陶器	山茶碗	(4.1)		
8	陶器	白鉢	5.4	<1.0	
9	磁器	小鉢	9.9	5.6 1.2	底部に崩れた

k.	屬種	素材	幾存率		最大幅	最深幅	最長	最短	出力位置	Xa	Yb	Zc	耗材	消耗率	最大幅	最深幅	最大長	最短	出力位區	
			存	失																
0	口	鋼 鐵	存	失	(19.4)	(9.3)	1.36	2.76	3.3	17	針?			鐵製品	1/1	8.2			14.01	M 2 II 区
1	捲	鋼 鐵	存	失	1.9	1.85	0.5	2.53	1-9	18	針?			鐵製品	(6.2)	(5.5)	D 2		8.03	P 14
2	光面鑄鐵	鑄製品	1/1	(後序、140件)					鉆	19	針?			鐵製品					10.30	少 - 9
3	油平瓦鋼	鑄製品	1/1	(中序、106件)					鉆	9	20	鉆?		鐵製品	(6.1)				4.88	7 - 9
4	鉚?													鐵製品	(4.3)				14.86	D 12
5	鉚?													鐵製品	(39.1)	2.7			14.86	檢出

萬葉集

No.	器體	形 式	規 格	文 標	出 土位 置	%	器 形	形 式	残存長 度	文 標	出 土位 置
1	深林	前期	(4.0)	織輪 单節輪	ク - 9	26	深鉢	加曾利E III - IV	(12.5)	深鉢	1 - 9
2	深林	前期	(4.5)	織輪 双節輪	ク - 8	27	深鉢	加曾利E III - IV	(7.3)	深鉢?	T a I II K
3	深林	前期	(2.0)	織輪 單節輪	D 2	28	深鉢	加曾利E III - IV	(6.8)	深鉢	D 1 6
4	深林	中期南北朝 - 新羅	(4.2)	織輪 單節輪	ク - 9	29	深鉢	加曾利E III - IV	(26.3)	深鉢	M 1 I - II K
5	深林	中期南北朝 - 新羅	(3.5)	織輪 刻槽 深鉢	T a I II K	30	深鉢	加曾利E III - IV	(7.5)	深鉢	沈縁
6	深林	燒町	(5.1)	織輪 深鉢	椚出	31	深鉢	加曾利E III - IV	(6.5)	深鉢	繩文
7	深林	燒町	(3.2)	織輪 深鉢	椚出	32	深鉢	加曾利E III - IV	(8.5)	深鉢	燒町 繩文
8	深林	燒町	(4.0)	刻付竹管型 泥輪	D 1 6	33	深鉢	加曾利E III - IV	(6.8)	深鉢	T a I II K
9	深林	燒町	(5.1)	刻付竹管型 泥輪	ク - 9	34	深鉢	中織輪半圓形E	(6.8)	深鉢	M II K 下層
10	深林	曾利 I	(3.4)	半竹管に土る織輪	T a I II K	35	深鉢	中織輪半圓形E	(3.8)	深鉢	利奥
11	深林	曾利 I	(3.5)	丸輪	T a I II K	36	深鉢	中期半圓形E	(5.7)	刻付竹管型 泥輪	T a I II K
12	深林	佐久系	(1.4)	織輪 深鉢	M I II K	37	深鉢	丸輪	(5.5)	深鉢	T a I II K
13	深林	佐久系	(5.3)	織輪 深鉢	M I II K 下層	38	深鉢	丸輪	(6.1)	深鉢	T a I II K
14	深林	曾利 I 目	(4.5)	太竹管 余根 繩文	T a I II K	39	深鉢	丸輪	(4.0)	深鉢	M 2 II K
15	深林	曾利 I 目	(5.0)	織輪 泥輪	ク - 1 0	40	深鉢	丸輪	(4.5)	丸輪	檢出
16	深林	曾利 I 目	(5.9)	口銘部無文	T a I II K	41	深鉢	丸輪	(2.8)	丸輪	M II K 上層
17	深林	曾利 I	(6.0)	口銘部無文	T a I II K	42	深鉢	丸輪	(2.0)	正頸付丸輪	T a I II K
18	深林	人木	(6.5)	半數竹管による模様 繩文	ク - 9	43	深鉢	丸輪	(4.5)	太竹付丸輪	T a I II K
19	深林	加曾利 E 目	(7.2)	織輪 繩文	M II K 下層	44	深鉢	丸輪	(4.0)	深鉢	檢出
20	深林	加曾利 E 目	(5.2)	織輪 泥輪	M II K 下層	45	深鉢	丸輪	(3.7)	深鉢	T a I III K
21	深林	曾利 I	(5.5)	半數竹管による模様	T a I II K	46	深鉢	丸輪	(5.5)	口銘	繩文
22	深林	人木	(7.5)	半數竹管による模様 繩文	T a I II K	47	深鉢	丸輪	(5.0)	丸輪	檢出
23	深林	加曾利 E I	(3.5)	浮輪	ク - 9	48	深鉢	丸輪	(5.2)	正頸付丸輪	M II K 下層
24	深林	加曾利 E I	(4.5)	半数竹管による模様? 泥輪文	M II K 下層	49	深鉢	丸輪	(5.7)	正頸付丸輪	檢出
25	深林	加曾利 E III - IV	(5.5)	繩文 光滑	T a I III K						

No.	器種	素材	陶石等	磨大母	磨大母	磨大母	出土位置	No.	器種	素材	陶石等	磨大母	磨大母	出土位置	
50	打撲石斧	陶石安山岩	10.4	5.5	1.6	121.45	M1 III K上層	56	石刀	黑鑿石		5.8	1.8	8.39	M1 II K下層
51	打撲石斧	石英綠岩	(4.9)	(4.9)	(1.1)	39.79	M1 III K下層	57	石器	黑色無安山岩		4.5	8.8	1.4	43.60 T a 3
52	打撲石斧	陶石安山岩	(9.1)	(5.5)	(1.8)	113.07	M1 III K下層	58	石核	黑鑿石		6.7	3.8	3.8	10.23 M1 II K上層
53	打撲石斧	黑色無安山岩	(5.8)	(6.2)	(1.2)	56.77	M1 III K上層	59	石核	ひすい輝石		2.6	1.5	0.5	37.70 M1 II K下層
54	石鏃	無機石	2.6	2.2	0.8	3.61	1 - 9	60	角盤未製品	燧狀岩		3.3	1.7	1.0	8.87 T a 3 II 区
55	石鏃	鉛竹葉	3.1	1.45	0.6	2.60	1 - 2								

第7表 土坑・ピット出発物

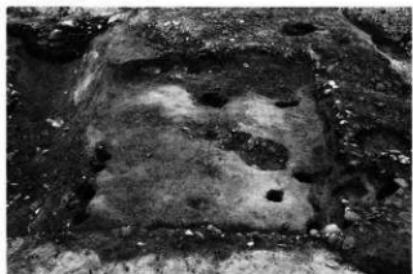
番号	出土位置	長軸×短軸×深さ	形態	出土位置	長軸×短軸×深さ	形態	出土位置
D2	ワ-4.5	276×198×59	方形	右通・上編片・脚部分	D11	イ-6	(136) × (55) × 41
D3	ワ-3	123×93×14	不整形	D12	イ-3	115×64×38	隅丸形 縄文片
D4	ワ-8	93×77×17	円形	D13	イ、ウ-4	109×120×32	隅丸形 縄文片
D5	ワ-7	120×95×29	橢円形	D14	ワ-3	113×88×35	不整形 土鍋片
D6	ワ-6	97×74×27	円形	D15	エ-3	118×71×38	橢円形 縄文片
D7	ワ-8	(206) × 175 × 40	橢丸形	D16	イ-9	355 × (170) × 42	橢円形 縄文片
D8	イ-6	112×64×18	橢円形	D17	イ、ウ-9	293 × 75 × 56	隅丸形 縄文片
D9	イ-6	97×84×41	円形	D18	イ-3	147 × <50	不整形 ビットあり・土鍋片
D10	イ-6	97×53×28	橢円形				
番号	出土位置	長軸×短軸×深さ	形態	出土位置	長軸×短軸×深さ	形態	出土位置
P1	イ-7	56×46×25.5	橢円形?	P14	イ-6	58 × (32) × 27.5	橢円形 縄文片
P2	ワ-6	50×42×40	橢円形	P15	イ-6	30×26×17	橢円形?
P3	ワ-7	56×52×45	円形?	P16	エ-4	32×30×12	円形
P4	ワ-6	47×41×42	橢円形	P17	エ-4	32×22×15	長方形
P5	ワ-6・7	82×60×21	橢円形	P18	ワ-3	32×32×40	方形
P6	ワ-6	60×50×27	橢円形	P19	ワ-3・4	28×26×14	不整形 縄文片
P7	ワ-6	51×44×19	橢円形	P20	エ-3	36×19×22	長方形 土鍋片
P8	ワ-7	54×46×10	橢円形	P21	イ-9	96×63×44	不整形
P9	イ-6	40×35×22	橢円形	P22	ワ-7・エ-7	48×38×27	橢円形
P10	ワ-7	45×35×10	橢円形	P23	ワ-7	46×35×26	橢円形
P11	ワ-6	35×32×19	円形	P24	ワ-7	43×40×25	円形
P12	ワ-6	55×46×24	橢円形	P25	ワ-8	96×65×27	橢円形
P13	ワ-6	65×58×28	三角形?	P26	イ-3	(45) × 44 × 28	



調査区全景（北より）



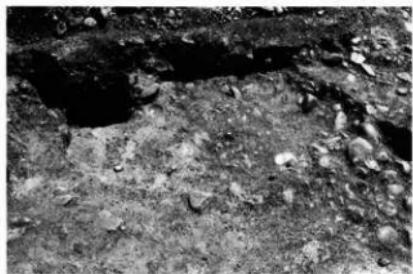
Ta 1 竪穴状遺構（西より）



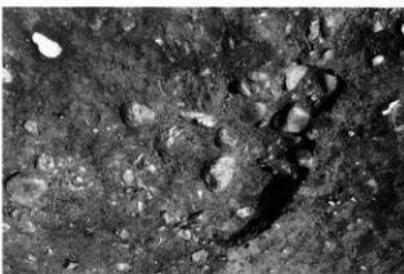
Ta 3 竪穴状遺構（東より）



Ta 3 竪穴状遺構掘り方（東より）



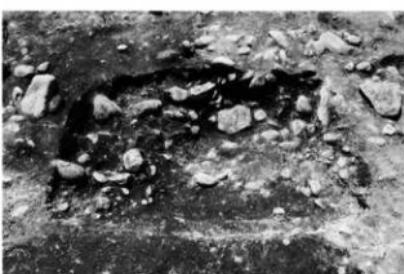
Ta 4 竪穴状遺構（西より）



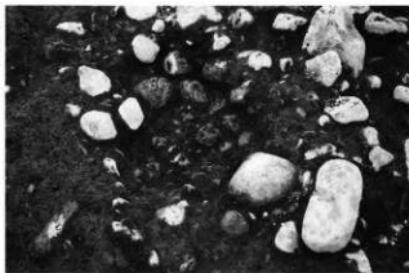
D 3号土坑



D 2号土坑石組み状況



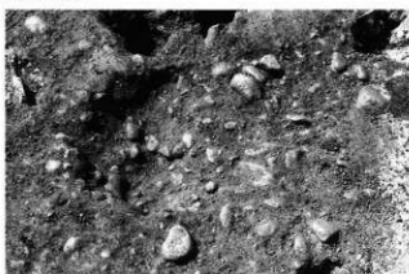
D 2号土坑掘り方状況



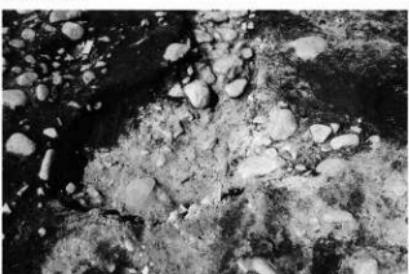
D 4 号土坑



D 5 号土坑



D 6 号土坑



D 7 号土坑



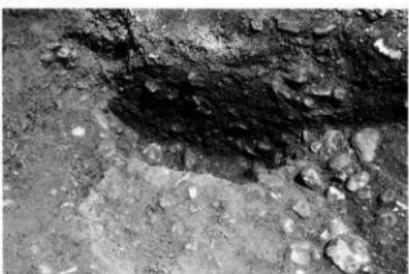
D 8 号土坑



D 9 号土坑



D 10 号土坑



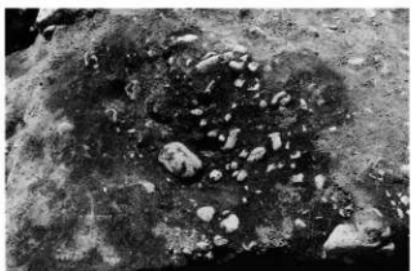
D 11 号土坑



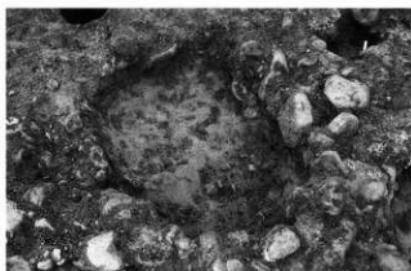
D1 2号土坑



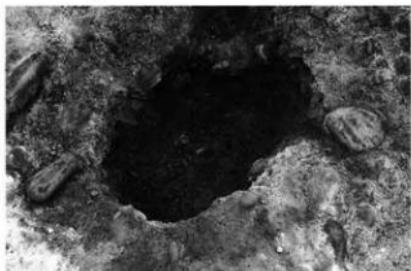
D1 2号土坑遗物出土状况



D1 3号土坑



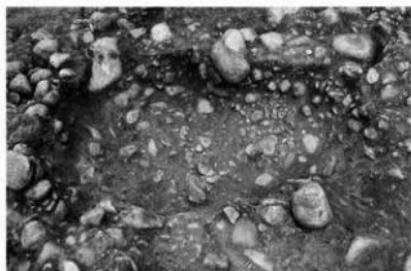
D1 4号土坑



D1 5号土坑



D1 6号土坑



D1 7号土坑



D1 8号土坑



M 1号溝状遺構（東より）



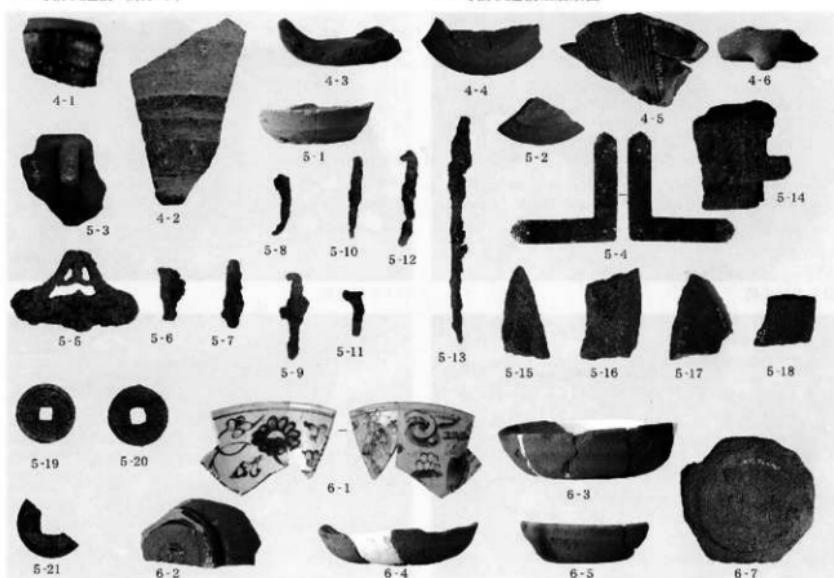
M 1号溝状遺構土層断面



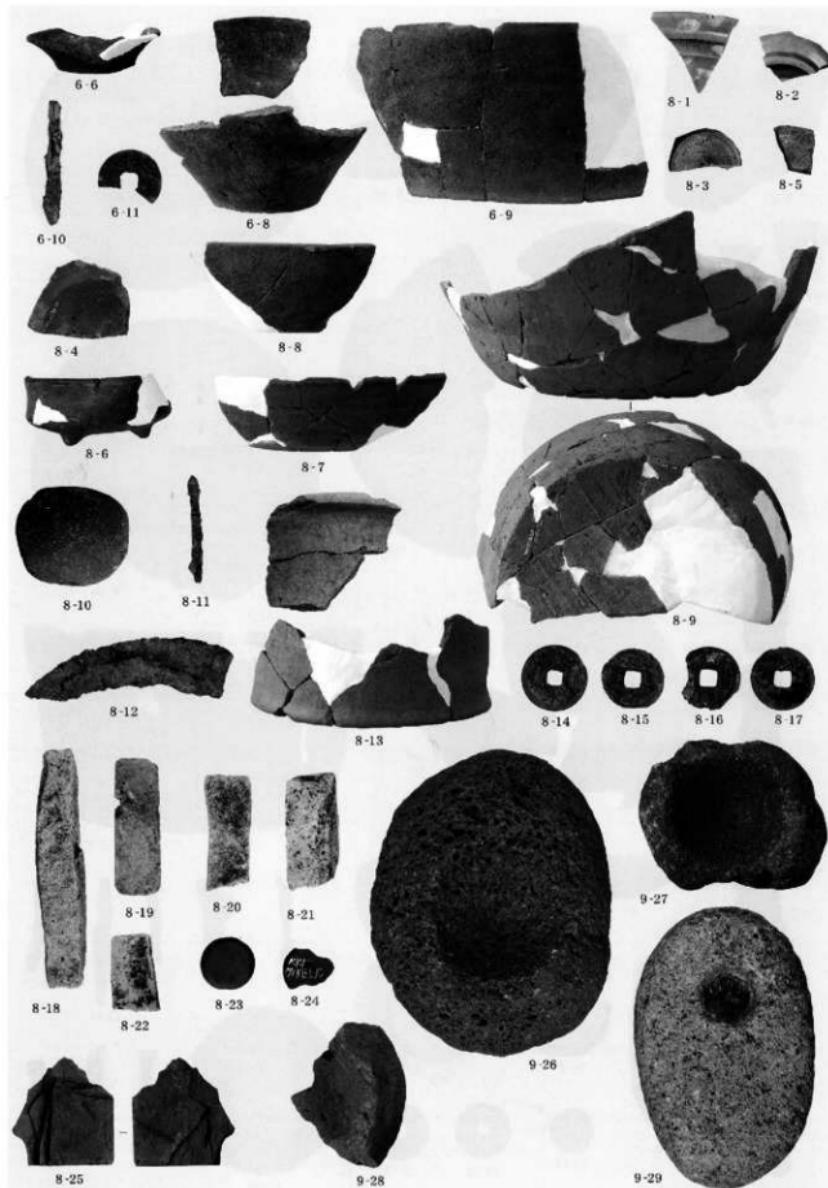
M 2号溝状遺構（東より）



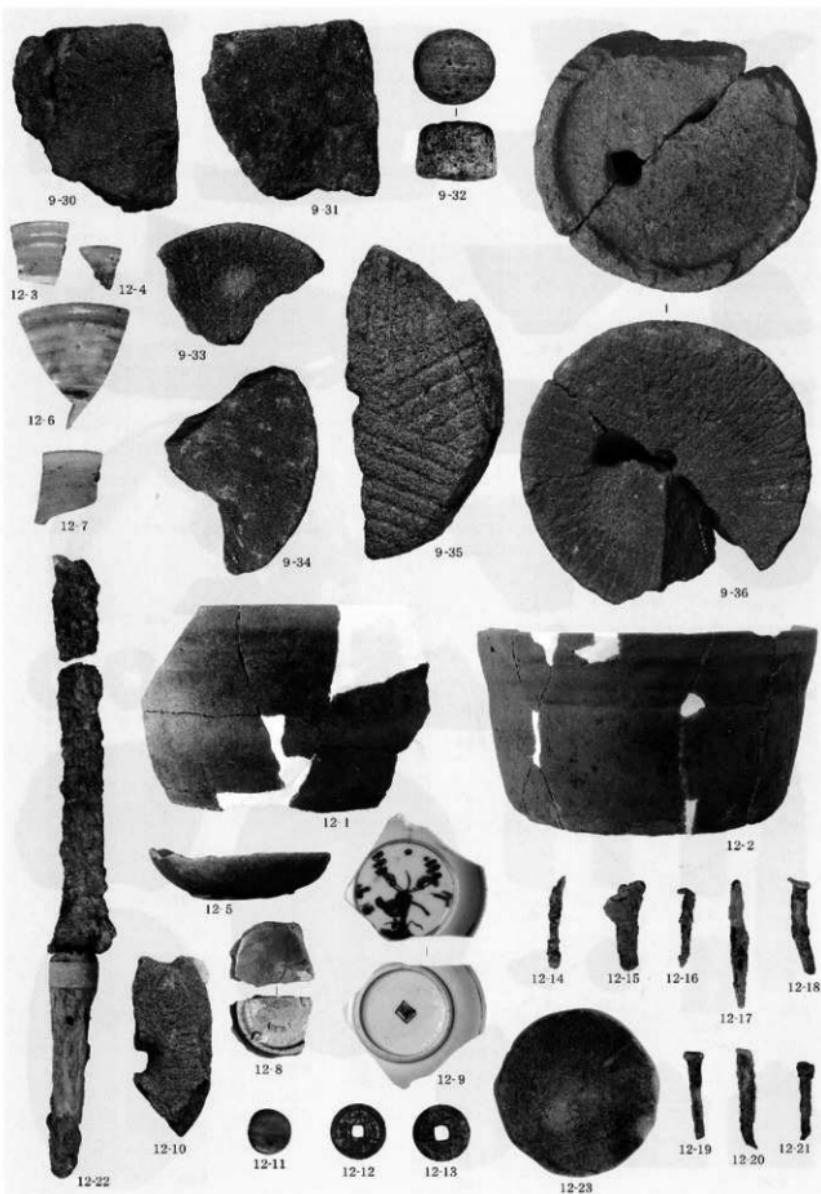
M 2号溝状遺構土層断面



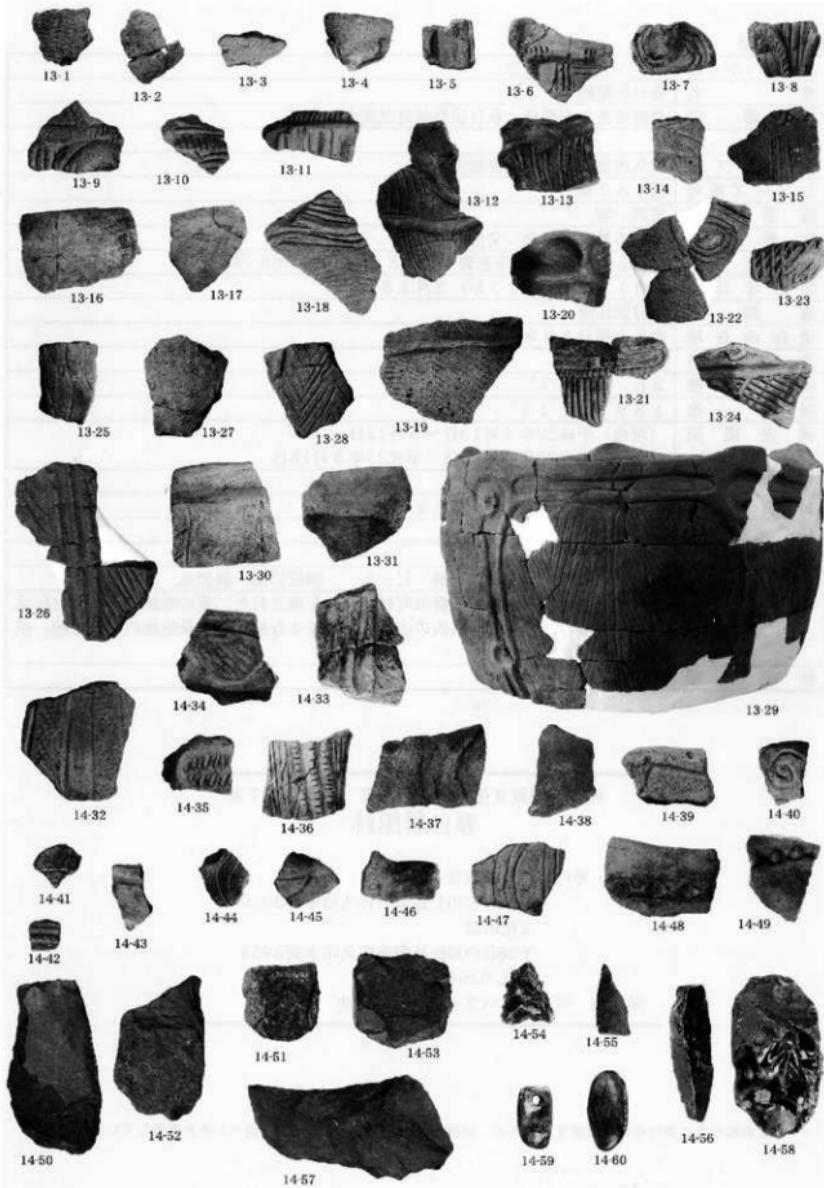
出土遺物①



出土遺物②



出土遺物③



出土遺物④

報告書抄録

ふりがな	かすがきよかんせき
書名	春日居館跡
副書名	長野県佐久市春日 春日居館跡発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第187集
編著者名	富沢一明
編集機関	佐久市教育委員会 文化財課
所在地	〒385-0006 佐久市志賀5953 TEL0267-68-7321
発行年月日	2011年(平成23年)3月18日
遺跡名	春日居館跡
遺跡所在地	佐久市春日2994-1
遺跡番号	1161
緯度	36°13'17"
経度	138°21'15"
調査期間	(現場) 平成22年4月13日~5月12日 (整理) 平成22年5月13日~平成23年3月18日
調査面積	300m ²
調査原因	佐久浅間農業協同組合 春日支所建設事業
種別	城館跡
主な時代	縄文・中世
主な遺構・遺物	竪穴状遺構、土坑、溝状遺構、ピット 陶磁器類、鉄製品、石器類
要約	明治初年に出土された「長野県町村誌」に記載された二重の堀跡が発見され伝承を裏付けられた。また、県内の出土として希少な例となる景德鎮の「五彩碗」が出土し注目された。
特記事項	

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第187集
春日居館跡

編集・発行 佐久市教育委員会
〒385-8501 長野県佐久市中込3056
文化財課
〒385-0006 長野県佐久市志賀5953
TEL 0267-68-7321
印刷所 キクハラリンク有限会社

